



森への視線

——日本の精神の基層

内山 節 Takashi Uchiyama

哲学者 NPO法人 森づくりフォーラム代表理事



山村の人たちは皆、森はいいものだという。毎日見ているのに飽きない、ともいう。

それは森が絶えず表情を変えるからでもある。春の森、夏の森、秋の森、冬の森。風に揺れる森。雨のなかの森……。

森のなかから鳥の音が聞こえてくる。動物たちが歩いている。山菜が芽生え、茸が姿を見せる。

かつては森のあちらこちから炭焼きの煙が上がっていたという。多くの地域では焼き畑も営まれていた。

そして森のなかで働くたくさんの人たちがいた。さらに森は神様が暮らす場所でもあった。そういう世界のなかで森は絶えず表情を変える。

その森の下では田畑が広がり、人々が暮らしている。そこもかつては森だったところだ。だから今でも少し放置しておくとも木が生えてくる。

自然は機会を見つけて太古の姿に戻ろうとする性格を持っている。森はいま木が茂っているところだけではなく、森に戻ろうとする場所も含めて、森なのである。なぜならそれは一体的世界として形成されているのだから。

だから森をとらえるときは、森のなかに広がる奥行きも、その下に展開する人間たちの世界も、「森林の空間」として一体的にとらえられなければいけない。「森林の空間」が広がる世界の中心に木が茂る空間が存在するだけである。自然の営みと人間の営みは断絶なく展開している。

そのことを絶えず感じながら暮らしていたから、日本人々は自然と人間を分けようとはしなかった。よく知られているように明治時代に翻訳語として「自然」という言葉が編み出されるまでは、日本では自然を意味する言葉が存在しなかったのだ

ある。「あの人」と同じように、人々は「あの森」や「あの川」を見つめた。

とすると森を経済的な装置として客観的にとらえることは、日本的な自然観に反していることになる。そしてだからこそ、戦後の林業は失敗した。村人の森を見る目は、客観的なものへの視線ではないのだから、そもそも矛盾していたのである。

しかしそれは、林業が日本ではなじまないという意味ではない。戦後の高度成長を背景にして生まれた、森を経済林としてのみとらえる林業がなじまなかっただけである。

森とともに暮らす、森とともに暮らす地域をつくるということなら、林業に問題はない。自然の営みと人間の営みが矛盾なく重なり合って、そこに一体的世界をつくるような林業なら、それもまた日本の自然観のなかの営みである。

戦後の日本はすべてのものを合理的にとらえようとした。森を合理的な経済装置に変えようとしたのも、その一つだった。だが森とともに暮らした人々の精神や営みは、合理だけでは割り切れないものだったのである。自然と人間の関係は、そのこととともに展開している。



森に抱かれたようにある集落。自然と人間の営みは矛盾するものではない
(福島県南会津町錦岩村)